

二〇二五年度

## 第二回 入学試験問題

【国語】 時間 45分

### 【校長からのメッセージ】

おはようございます。

肩の力を抜き、深呼吸をしましよう。

左の【注意】をていねいに読んでください。

あなたが鷗友生として、この教室で過ごす日を想像してみてください。  
大丈夫。あなたの力が十分に發揮できることをお祈りしています。

### 【注意】

- 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 問題用紙は、全部で14ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督の先生を呼んでください。
- 解答用紙は問題用紙にはさまれています。
- 問い合わせに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

小原悟は、父・孝雄が親方を務める南部鉄器の工房「清嘉」で職人として働いていた。ある日孝雄が、非行のあつた少年と共に暮らしながら指導する補導委託<sup>ほどういたく</sup>を引き受け、孝雄と悟は十六歳の庄司春斗と共に生活することになった。

春斗は、補導委託中も勉強に励み課題を実家に送ることを、両親（父・達也と母・緑）に約束させられていた。春斗が課題を送つてこなくなつたことに焦<sup>あせ</sup>つた緑が春斗を連れ戻<sup>もど</sup>そうと孝雄の家を訪<sup>おとず</sup>れたが、春斗は大人たちの目を盗<sup>ぬけ</sup>んで雨の中を脱走<sup>だつそう</sup>する。春斗を探しに出た悟は、盛岡八幡宮の境内で彼を見つけた。

悟は孝雄から、なにかを強いられたことはない。その逆だ。家族に関しては無関心で、悟が清嘉で働くことになつたときも、そうか、のひと言だけだつた。跡を繼ぐことを強制されるかもしれないと思つたが、そんなことは一度もなく、むしろ、嫌になつたらいつでも辞めていい、と言われた。少しは期待をされるかと思っていたのに、孝雄の反応はまったく違うものだつた。そんな悟からすれば、達也の春斗への接し方は少々過度には思えるが、それは子供への愛情に根ざしたものだ。春斗は大切にされていると思う。

悟がそう言うと、春斗は勢いよく顔をあげて悟に向かつて叫<sup>さけ</sup>んだ。

「じゃあ、どうして僕<sup>ぼく</sup>を苦しめるんだよ！」

悟は返す言葉に詰まつた。

「本当に大事なら、僕を苦しめないだろう。何度も、自分がやりたいことをしたいって言つても許してくれない。辛<sup>つら</sup>くて、胸が苦しくなつて、自分でもどうしていいかわからなくなつて、気づくと物を盗んでいたんだ」

春斗の顔が、怒りのそれから悲しみの表情に変わる。

「補導委託つていう制度があるって知つたとき、やつてみたいって思つたんだ。だめな自分を変えるには、いまの環境<sup>かんきょう</sup>から離<sup>はな</sup>れるしかないって思つたから。そしてお父さんに、補導委託に関して裁判所の人から詳しく述べ話を聞きたいって言つた。でもお父さんは、そんな必要ない、としか言わなかつた」

悟の脳裏に、家の茶の間に座っていた達也の顔が浮かぶ。厳しい目つきと崩さない表情に、意志の強さを感じた。

「僕は部屋に閉じこもって抵抗した。そこまでしてやつとお父さんは、もし補導委託になつたら、毎日勉強して週に一度、課題を家に送ることを条件に、話を聞くことを許してくれたんだ。僕は補導委託先でも、お父さんやお母さんから縛られるのが嫌だつたけれど、その条件をのんだ。けれど、もう無理だ。僕のためだつて言いながらも、心のなかでは自分のことしか考えないお父さんとお父さんの言いなりにしかなれないお母さんとは、これ以上やつていけない」

①春斗の悲痛な心の叫びに、悟は心が痛んだ。八重樫のように、環境に恵まれない形で育つた者には、春斗の訴えは贅沢なものと映るかもしれない。しかし、人生で一番辛いのは孤独ではないか、と悟は思っている。お金があつても、親しい人がいても、どこまでも自分に寄り添ってくれる人間がいなければ、心は満たされない。逆に、環境が整つていなくても、自分のことを心から支えてくれる者がいれば、どのような問題にも立ち向かっていくのではないか。

## 【中略】

春斗と悟は、ひとつのかさ傘に入つて歩く。途中、悟は春斗に訊ねた。

「さつき、お父さんは許してくれないけれど②自分にはやりたいことがある、そう言ってたよね。それってなにかな」

春斗は歩きながら、ぽつりと答えた。

「動物にかかわる仕事」

「獣医師とか？」

春斗が首を横に振る。

「動物の世話をしたいんだ」

隣を歩いていた八重樫が、つっけんどんに言う。

「それじゃあ、漠然としそうだろ。ドッグトレーナーとか動物園の飼育係とか、もっとはつきりしろよ」

「僕だって、まだわからないよ」

「いらだ  
苛立つた様子で、春斗が言い返す。

「ただ、動物の看病とか治療じやなくて、育てたり日常の面倒を見たりしたいんだ」  
小学生のときの遠足や中学校の社会見学で、牧場や乗馬の体験施設を訪れたが、そのときに触れた動物の温かさがずっと忘れられないという。

「動物は僕になにも求めない。僕が落ちこぼれでも、性格が悪くても、ただそこにいてくれる。そんな動物たちと一緒にいたいし、彼らの役に立ちたいんだ」

春斗がリンとレイに会ったときの光景が、思い出される。両親から抑圧され自信を失った春斗にとって、動物たちはどんな自分も受け止めてくれる存在なのだろう。

「甘い」

八重樫がびしやりと言う。

「そんな曖昧な考え、親父さんが許すわけないよ。お前さあ、動物がらみの職で食つていくのがどれだけ大変か知つてるか。歯医師ならまだしも、多くは労力と収入が釣り合わない仕事だ。生半可な気持ちなら、やめたほうがいい」

「僕は本気だ！」

春斗は立ち止まり、八重樫に向かつて叫んだ。

春斗は挑むような目で、八重樫を見た。

「どの仕事を目指すかはまだ決めていないけれど、どうしても動物とかかわる仕事に就きたいんだ。考へている以上に大変だろうし、お金で苦労もするだろうけれど、それでもいい。僕の気持ちは変わらない！」

春斗はひと呼吸置いてから、声を静かなものに戻した。

「盛岡八幡宮で、レイが頑張って段差を乗り越えたとき、僕も勇気を出して前に進まないといけないって思つたんだ。まだ先はぽんやりとしているけれど、まずはお母さんに、もう勉強はしない、って言うことが最初の一歩だと考へたんだ。でも、あんなことになつてしまつて——」

「いまの話、そのままお母さんに言えるかい」

そう問うた悟を、春斗が不安そうに見る。

「自分の考えを口にしたことはあつても、ここまで必死に伝えたことないだろう。両親の理解を得るには、春斗くんが本気でつてことをわかつてもらうことが大切だ。この熱意をぶつければ、きっと気持ちが通じる」

隣で八重樫が、傘を閉じた。うえを見る。

「雨、止んだっすね」

悟も空を見上げた。夜空にかかった雲の隙間から、ちらちらと星が瞬いている。傘を閉じて、春斗に言う。

「行こう」

春斗は頷いて、歩き出した。

家の玄関を開けると、茶の間からものすごい勢いで由美が出てきた。ずぶ濡れの春斗を見て泣きそうな顔でしたが、すぐに怒り出す。

「もう、すつぐく心配したのよ！ いてもたつてもいられなくて、お店、飛び出してきちゃった！」

(注4)けんじ(注5)健司と田中もやつてきた。健司は前に転んでいた。健司は前につんのめるようにしながら玄関の三和土に駆けおりると、春斗の全身を眺めた。

「春ちゃん！ 大丈夫か、転んだりしてねえか！」

「健司さんのほうが、危なつかしいですよ」

八重樫が、ぼそりと言う。いつもならここで言い合いになるのだが、いまの健司は八重樫など目に入らないのだろう。春斗の頭を撫でながら、鼻声で言う。

「いやあ、よかつた。俺は、春ちゃんが早まつたんじやねえかつて、心配でよう」

健司が涙を啜ったとき、孝雄が茶の間から出てきた。神妙な面持ちで、春斗の前に立つ。

「いましがた、お父さんがお見えになつた。茶の間で、春斗くんが戻るのを待つてゐるよ」

春斗の顔が強張った。隣にいる悟にまで、緊張が伝わってくる。安心させようと肩に手を置くと、春斗がこちらを向いた。目で、頑張れ、と伝える。悟の気持ちが通じたらしく、春斗は唇をきつく結び、靴を脱いだ。

孝雄は健司と八重樫、由美を帰し、春斗と悟に濡れた服を着替えるように言う。手早く着替えて茶の間に戻ると、春斗はすでに身支度を整えて、孝雄の横に座っていた。春斗と向き合う形で座っている両親の脇には、田中がいる。

悟が春斗の隣に座り、達也がここにいる経緯を訊ねると、田中が端的に説明した。

悟たちが春斗を探しに出かけたあと、田中は緑に、達也に連絡を入れるよう促した。補導委託中の少年が問題を起こした場合、保護者に速やかに連絡することになっている。詳細はあとでもいいから、いなくなつたことだけは伝えてほしいと頼まれた緑が電話をすると、達也は仕事を切り上げ、仙台から駆けつけたという。

「お父さん、春斗くんのことをとても心配していたんだよ」

田中に話しかけられても、春斗はしたを向いたまま黙つている。

「春斗」

達也が名前を呼んだ。春斗の肩が、びくりと跳ねる。

「お前、約束も守らず、こんな面倒ごとを起こしてなにを考えているんだ」

静かだが、身が竦むほど冷たい声だった。達也は孝雄と悟に深々と頭をさげた。

「この度は愚息が迷惑をおかけして申し訳ありません。改めてお詫びに伺いますが、春斗はこのまま連れて帰ります」

田中が慌てた様子で、あいだに入った。

「待ってください。それにはこちらも手続きが必要なので、今日は無理かと——」

達也は厳しい口調で、引きとめる田中に言う。

「私は最初から、自分の子を他人に預けるなんて気が進まなかつたんです。仙台家裁の担当者からは、自宅で様子を見る在宅試験観察の話もありました。でも、春斗が補導委託で頑張つてみたいと言つたから賛成したんです。今後のことばは改めて裁判所にご相談させていただきますが、今日のところは自宅への一時帰宅という形を取らせてください」

俯いていた春斗が、顔をあげた。まっすぐに達也を見る。

「お父さん、僕の話を聞いて」

強い意志を感じさせる声に、達也が居住まいを正した。

「なんだ」

「僕、お父さんが望んでいる道には進まない。自分が好きなことをしたいんだ」  
達也の眉間に、深い皺が寄る。

「その話は前にも聞いた。私は、もっとよく考えろと言つたはずだ」

「考えたよ。でも、やっぱり気持ちは変わらない。動物にかかる仕事がしたいんだ」

春斗は盛岡八幡宮の境内で悟に話したときと同じ——いや、それ以上の熱量をもつて、達也に自分の気持ちを伝えた。達也を除く誰もが、いつも無口でどこか冷めた目をしていた春斗が、こんなに自分の将来を熱く語るとは思っていなかつたらしく、  
気圧されたように聞き入っている。

自分の心のうちを一気に吐き出した春斗は、乱れた息を整えながら、達也に頭をさげた。

「お願いします。僕が進みたい道に行かせてください」

春斗の本気が伝わったのか、緑はなにも言わず静かに目を閉じて俯いた。田中も胸を打たれたような顔で、春斗を見ている。  
しかし、達也は違った。怖いくらい険しい顔で、春斗を見据えている。やがて、ぽつりと言った。

「話はそれで終わりか」

さげていた頭を、春斗が勢いよくあげた。顔には哀しみと悔しさが浮かんでいる。

「あなた、そんな言い方——」

隣にいる達也の腕を、緑がおどおどとした様子で掴んだ。達也はその手を振り払い、自分の腕時計を見た。

「これ以上遅くなると、新幹線の最終に間に合わなくなる。春斗、必要な荷物をすぐに持つてきなさい。それから田中さん、春斗の一時帰宅の許可と、後日でけつこうですので、今後の在宅試験観察への切り替えをお願いします」

田中が、どうするのか、と問うように、春斗を見た。

春斗はしばらく頃垂れて黙っていたが、なにかを決意したようにいきなり立ち上ると、茶の間を出て二階へあがつていつた。

「春斗くん！」

悟は急いで、春斗を追つた。春斗は来たときに持つてきたボストンバッグに、必要なものを入れていた。そして、ファスナーを閉めると肩にかけ、畳から立ち上がった。

春斗の前に立ちはだかり、訊ねる。

「家に戻るのかい」

春斗が頷く。悟は悔しくなり、思わず手を強く握りしめた。

「そんな——それは、お父さんの言いなりになるつてことか。さっき境内で俺に言つたことは、そんなに簡単に諦められることがったのか」

問い合わせる悟に、春斗は微笑んだ。

「僕は諦めない。きちんとお父さんと向き合うために、一度、家に戻るんだ」

春斗の毅然とした態度に、悟は息をのんだ。

「いますぐ、この場でお父さんを説得するのは無理だ。僕は今まで、お父さんから逃げてきた。でもそれじやあ、なんの解決にもならない。逃げてきた分、理解してもらうには時間がかかるつてわかつたんだ。だから、家に帰つてお父さんと向き合う」昨日までの春斗とは別人のように大人びた感じがして、悟は戸惑つた。春斗が部屋を出て、階段を下りていく。我に返り、悟はあとを追つた。

階段を降りると、全員が玄関にいた。達也と緑はすでに靴を履き、三和土に立つてゐる。春斗は靴に足を入れてゐるところだった。

「本当に、このまま春斗くんを家に帰していいんですか」

悟はどうしても納得できず、田中にそつと訊ねた。田中が不本意そうに、小声で答える。

「一時帰宅という形であれば、手続き上の問題はありません。もちろん、私から清嘉へ残るよう命じることもできますが、保護者と本人が希望していないのに引きとめても、いい効果は得られないと思います」

達也は、孝雄たちに向かつて恭しく頭をさげた。

「(ハ)面倒をおかけしました。お礼は後日、改めてさせていただきます」

達也の隣で、緑も暗い表情で腰を折つた。春斗も軽く会釈をする。達也がためらう様子もなく、玄関の戸を開けた。

春斗が行つてしまふ。言いたいことはたくさんあるのに、なにを言えばいいのかわからない。悟は拳を強く握り、とつさに叫んだ。

「味方だから！」

達也の後ろにいた春斗が、足を止めて悟を振り返つた。悟は春斗の目をしつかりと見つめて、もう一度、繰り返した。

「俺、春斗くんの味方だから」

田中に、春斗から頼まれてチャグチャグ馬コを見に行く、と電話で伝えたとき、春斗くんにとつて清嘉の人たちは味方なんですね、と言われた。そのときは半分恥ずかしく、半分そう思えなくて言葉を濁したが、いまならはつきりと言える。なにがあつても、春斗の味方だ。

春斗の目が、潤んだような気がした。悟の目をまっすぐに見つめ、強く頷く。

両親のあとに続こうとした春斗は、達也にぶつかりそうになり立ち止まつた。

「それは、どういう意味ですか」

玄関を出て行こうとしていた達也が、悟に向き直つていた。

「いまのあなたの言い方は、まるで私たちが春斗の敵だと言つているようだ」

悟は急いで詫びた。

「そんなつもりじゃ——そう聞こえたのなら謝ります、すみません」

よほど気に障つたのか、達也はしばらく怖い顔で悟を睨んでいたが、やがて、深いため息を吐き誰にともなく言つた。「運が悪かつたな。もつとまともな家なら、春斗もこんな風にはならなかつただろう」

達也の言葉に、悟は怒りを覚えた。

「ちよつと、待つてください」

玄関を出て行こうとする達也を、悟は呼び止めた。

「まだ、なにか」

達也が顔だけで振り返る。

「俺のことは、どうでもいい。でも、親父のことを悪く言うのはやめてください」

隣で孝雄が、驚いた顔をする。悟も、思わず口をついた自分の言葉に驚いた。

「まあ、悟さん」

田中が悟と達也のあいだに、割つて入つた。しかし、悟の怒りは収まらない。立ちふさがる田中を横に押しのけ、達也の前に立つた。

「あなたは春斗くんの敵ではないけれど、味方じやない」

「なに」

達也が気色ばみ、悟に顔を近づけた。悟は引かない。仁王立ちになり、きつぱりと言う。

「俺から言わせれば、あなたは春斗くんの応援者おうえんしゃにすぎない」  
③  
達也は一瞬いっしゅん、意外そな顔おもてをしたが、すぐに鼻で笑つた。

「なにを言うかと思えば。親が我が子こを応援するには当然でしよう」  
「応援することと、味方みわをすることは違う」

悟の言葉に、達也が眉まゆをひそめた。

「応援しているスポーツ選手が負けると責めるやつがいるけれど、勝手に期待して自分の望んだ結果が出ないと怒るなんて、俺から言わせれば身勝手だ。でも、その人が自分が望んだ結果を出せなかつたとしても、寄り添い支え続ける人がいる。それが味方だ。いまのあなたは応援者だ。親っていうのは、子供の一番の味方であるべきなんじやないんですか」

達也は悟の話をじつと聞いていたが、やがて背を向けるとひと言だけつぶやいた。  
「理屈りくつで、子供を育てることはできない」

達也が玄関を出ていく。緑が春斗を連れて、急いであとを追つた。緑が玄関の戸を閉めようとしたとき、春斗が振り返つた。  
一瞬、目があつた。<sup>④</sup>その目には、強い覚悟かくごのようなものが浮かんでいた。

(柚月裕子『風に立つ』)

(注1) 八重樫……清嘉で働くアルバイト。

(注2) リンとレイ……盛岡の伝統行事「チャグチャグ馬コ」に出でいた馬の名前。

(注3) 由美……孝雄の娘で、悟の妹。

(注4) 健司……清嘉の職人。

(注5) 田中……補導委託の担当をしている家庭裁判所調査官。

問一　——線部①「春斗の悲痛な心の叫びに、悟は心が痛んだ」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

問二　——線部②「自分にはやりたいことがある」とあります、春斗はどのようなことを「やりたい」と思っていますか。「やりたい」と思っている理由もふくめて説明しなさい。

問三　——線部③「あなたは春斗くんの応援者にすぎない」とはどのようなことですか。百字以内で説明しなさい。

問四　——線部④「その目には、強い覚悟のようなものが浮かんでいた」とありますが、春斗の「強い覚悟」とはどのようなことですか、説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

夢を見るることは、得てして地に足がついてないように映り、脳内お花畠、とか、夢見がちの不思議ちゃんとか、最近それを揶揄する風潮が強いように感じます。でも、地に足をつけるということが、1+1が2になつて喜ぶことを指すのなら、それは何とつまらないことでしよう。また、自分の力を把握するということが、自分の限界を決めることを意味するのなら、それは常に有益な作業とは言えません。なぜなら生き物の最大の特徴の一つは成長することにあり、自分の限界だと思っていることを超えていくこと、1+1が3にも4にもなることが、人間の世界では実際に起こり得るのです。今の自分には届かないようなことであつても、それを夢見つづけることで、いつかそこにたどり着く。それは、それに向けた情熱や努力があれば、必ずとは言えませんが、少なくない確率で、人生で起こつていくのです。そう、夢見る力こそが、人が使える「魔法」、より正確に言えば、いつも成功するとは限らない「魔法のようなもの」なのです。

デイズニーの「ライオン・キング」に、主人公である子ライオンのシンバが、失意の中、ミーアキャットのティモントイボイノシシのパンバアに助けられ、ジャングルの中でつましくも楽しく暮らしていく場面があります。自分のせいで父親が亡くなつたと思って絶望しているシンバは、陽気なティモントンバアが歌う「ハクナ・マタタ（心配ないさ）」に勇気づけられ、王子としてではなく、ジャングルに生きる1匹の動物として暮らしていきます。しかし、ある日、水面に映った自分の姿を見て、①再びライオンとして、王として生きる道を選んでいくというストーリーです。初めてこの映画を見た時、私はこのストーリーに大いに違和感を持ちました。何もライオンとして生きていくのが偉いわけでなく、ティモントンバアと共につましくも楽しく暮らしていくつ一体何が悪いのだ、とそう思いました。実際、この物語を世襲制の絶対王政を賛美していると批判する人たちもいます。

しかし、今思うのは、シンバは勇気をもつて再び立ち上がったということです。それは王が偉いとか、イボイノシシは臭いとか、そういうことではありません。一番大切なことは、シンバが本当にやりたいことは何だったのか、という点なのです。青年になつたシンバのたくましい体と鋭い爪で、昆虫や植物を食べる生活は、本当に心の充実感を得られ

たものだつたでしようか？ いくら日常的に楽しく暮らしていけたとしても、ここは自分の居場所ではない、そう感じることはなかつたのでしようか？ 王になるというのはあくまでメタファなのです。<sup>(注)</sup>

別れたとえで言えば、もしかなたが何かの植物の種子だとしたら、その中には、たとえばイネになつていくような、あるいはハクサイになつていくような遺伝子が、別の言葉で言うなら可能性が、秘められています。もしハクサイの種を水田に植えたとしても、イネにはなりません。もちろん水の中ではハクサイとしても育つていませんが、その種子の中にはハクサイになりました、というような内的な欲求と言えばよいのか、可能性と言えばよいのかわかりませんが、何かそういう“どうにもならないもの”が備わっているのです。肉食動物は、やはり肉が食べたいのです。なぜ昆虫食ではいけないのか、と問うてみても、それはあまり意味がありません。そういう“どうにもならないもの”が、すべての生き物の中に、そしてすべての人の中には秘められており、それは何かを好きになつたり、何かに情熱を持てたり、そういう形で発露してくるのではないか、私はそう思うのです。

夢を見ることは、そういつた“どうにもならないもの”と、少しつながつているように思います。何かに憧れたり、何かを好きになつたり、それは誰に頼まれた訳でもなく、自分の中に湧き上がるがつてくる感情です。大谷翔平選手はどうして野球をやりたいと思うようになったのか？ 藤井聰太棋士はどうして将棋を始めたのでしょうか？ そんなスーパーパーマンのような人たちのことを考えてみても、自分とは無関係に思えるかもしれませんのが、彼らもそういう自分の中にある純粹な情熱に基づいて行動を始め、「野球をもつとうまくなりたい」、「将棋をもつと強くなりたい」その思いを大切にして、今も努力を続けていくようと思えます。そういった情熱に従うことや、夢を持つことは、自分に少し負荷をかけることです。筋トレをすれば少しずつ筋肉がついていくように、その負荷と向き合うことで少しずつ自分が成長していきます。

あのMLBで投打とも超一流の活躍をする二刀流など、誰が可能だと思ったでしょうか？ MLBでは無名だった、かつての大谷選手を考えれば、それは地に足のついていない脳内お花畠のよくなおとぎ話に映つたはずです。大谷選手がそれをできると信じて努力しなければこの世に現れるはずがなかつたことが起こり、今では「大谷ルール」と呼ばれる新しいルールがMLBに導入されました。彼の夢が、世界の形を変えたのです。

②夢見る力は世界を変えていく「魔法」です。誰かが夢見なければ、この世に現れなかつたものが、夢見たことで現れる。そこには呪文こそありませんが、それは魔法の定義そのものです。だから世界各地にあるたくさんの童話やファンタジーは、子供たちが夢を見られるように、「魔法」を使えるように、その大切さを心に刻むように、多くの魅力的な物語を紡いでいるのです。夢見ることは、決して恥ずかしいことではありません。恥すべきことがあるとするなら、それはその実現に向けての努力を怠つてはいることだけなのです。

(中屋敷均『わからない世界と向き合うために』)

(注) メタファ……<sup>ひゆ</sup>比喩の一種。

問一 線部①「再びライオンとして、王として生きる道を選んでいく」のはなぜだと筆者は考えていますか、説明しなさい。

問二 線部②「夢見る力は世界を変えていく『魔法』です」とはどうのようなことですか、説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 全国をまわって民話をサイロクする。

(2) ハクヒョウを投じる。

(3) ヨダンを許さない。

(4) シツソな生活を続ける。

(5) 自由と権利はニリツハイハンである。

## 第一回入学試験 解答用紙 【国語】

受験番号
氏名
得点
このらんには 何も書かないこと

三	問一	問二	問四	問三	問二	問一	
(1)							
(2)							
(3)							
(4)							
(5)							
	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①